

同窓意識の拠りどころ

—古い卒業生による中等学校教育の評価—

酒井 為久

1. 前文

中学校と高等学校が併設されている、小規模な教育研究校（名古屋大学教育学部附属中・高等学校）に勤務している年数が、33年目を迎えた。

私は、昭和22年に発足した新制中学の第一期生で、同じ昭和22年に創設された勤務校の第一回卒業生である。

この間、社会の変動や教育界の種々な試みに揺られ続けてきた経験から帰納して、教育現場の中から何かが見え始めていると言いうる年令となった。

見えてきたものは、自由な雰囲気の研究実験校に勤務しているという、狭い視点からのものではあるが、視座が一定であるという利点が活かされて、中等学校教育の本質に触れるものであるように思われる。

そういう何かを、少しでも明確にしておくのが、私の仕事の一つであると考え、この稿を書くことにした。

2. 教えられる側からの教育評価

さて、中等学校教育の総合的な成果をどう測定するかという問題である。

現代は、学校業務も専門化・分業化しており、その各部門においての点検と業績の確認を総合化して、一つの学校の教育全般を評価するのが普通のやり方であろう。

教える側が中心となって、それぞれの部門について現状分析をしたり、それについての生徒の向上・成長の度合いを判定したりするのである。

その際、基準となるのは、当然のことであるが、教育行政や上級学校や社会の要請、あるいは同じ中等学校の教育実践や教育関係研究の指し示すもの、そして教師の指導目標等である。

しかし、その一方で、教育成果の本当の姿は、長い時間をかけて、生徒が社会人として一人前になった後でないとわからないものだという信仰のようなものがある。

そこで、教育される側からの教育評価という観点も必要となってくる。

教育される側にとっての教育は、一回限りのものであり、その後の人生経験の深まりにより色々な意味を加えて、常に当人とともに存在している。棺を覆って事定まる構造の基礎部分を占めている。

教育された成果を長い歳月の眼で見て、その後の社会生活をからめながら、当人なりの評価をしていくのである。

そういう中等学校教育の評価について、本校の場合を事例として考えてみたい。

3. 卒業生に対するアンケート調査

私は、本校同窓会の誕生から今日まで、約35年、その仕事を担当してきた。

余暇のすべてを使うこともしばしばであったが、お蔭で、昭和63年7月刊行の「名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第33集」に次の小論を載せることができた。

「同窓会というもの」 酒井 為久

この論文を読んでもらいたい、と同時に、読んでもらえるだろう古い卒業生の多くの顔が浮んできた。出来上がった抜刷は210部である。

それを発送する時、中等学校教育の評価のことなど考えながら、次の手紙文を添えた。昭和63年の11月のことであった。

研究紀要の抜刷をお送りします。

研究物としては、誇大表現の部分もありますが、主題は目新しいものではないかと思えます。日頃のご支援を感謝致したく、不十分な出来をかえりみず、送らせていただきました。

なお、この研究物の続編のための「アンケートはがき」を同封しました。ご多忙のところまことに恐縮ですが、

附中・附高の学校生活時代の思い出の中で印象深い事柄を五つ
ご回答いただく、アンケートにご協力をお願いする次第です。

附中・附高時代の学校生活関係で、思い出深い事柄を五つ、できれば具体的に、順不同にて書きくださったものをまとめて、同窓意識の源流を訪ねてみたいと考えています。

記名・無記名いずれでも結構ですから、ぜひとも回答をお寄せくださいますようお願い致します。

同窓意識の拠りどころ

回答のはがきは、平成元年（昭和64年）の年頭ごろまでに届いた。

一通一通のはがきは、それぞれ古い卒業生が、教えられた側の立場から、長い時間の眼で見て、名大附属中学校・名大附属高等学校を評価したものと受け取ることができた。

4. アンケートの回収率

研究紀要抜刷とともに送った「アンケートはがき」の送り先についてである。

平成2年3月高校卒業生が第38回生であり、第1回生からそこまでの卒業生数は約5200名である。

用意した「はがき」は210通、抽出調査である。そこで、次のように送付した。

第1回生 118通（男子70通 女子48通）
最も古い卒業生は連絡できる人すべてに発送した。これでほぼ全員。
第2回生から第34回生まで
47通（男子31通 女子16通）
各回2名を原則に、日常同窓会活動に熱心な人を選んで発送した。
第36回生 45通（男子23通 女子22通）
新しい卒業生の3分の1を無作為抽出して発送した。

付け加えて、校内高校3年生（第37回生）にアンケート項目を印刷した用紙を渡し、記入してもらったものが35枚。第37回生全体の4分の1の生徒である。

次に、発送したアンケートの回収状況を記しておく。この回収状況そのものが、参考材料として役立つものと思われる。

第1回生 18通（男子13通 女子5通）
回収率 全体 15.2%
（男子 18.5%）
（女子 10.4%）
第2回生から第34回生まで
21通（男子12通 女子9通）
回収率 全体 44.6%
（男子 38.7%）
（女子 56.2%）
第36回生 12通（男子5通 女子7通）
回収率 全体 26.6%
（男子 21.7%）
（女子 31.8%）
合計 51通（男子30通 女子21通）
回収率 全体 24.2%

（男子 24.1%）
（女子 24.4%）

以上の回収率を、同窓会の仕事をしてきた者としては良好であると見るのであるが、その理由は同窓会というものがもともと「本尊のない宗教に近いもの」だと思われるからである。

5. 古い卒業生の回答 その一

「アンケートはがき」の文面は、次の通りである。

（同窓会アンケート）附中・附高の学校生活時代の思い出の中で印象深い事柄を五つ、具体的、順不同にてお書きください。

以下は、その回答である。

〔1〕男、56才

ア、女生徒から手紙を貰い、親父がこんなことは不良のすることだと言って、開封されてしまったこと。手紙は事務連絡でした。

イ、雨の日、美術室の隣の空き部屋でサッカーのボールを蹴っていたら、美術のN先生に往復ビンタを食らって叱られたこと。隣の棚のピーナスが揺れて落ちる寸前でした。

ウ、岩倉先生のタバコ好きが印象的でした。

エ、サッカー部の面々とのおもいで。

オ、投票で誰かが「金太郎」と書いたときの織田先生の怒り顔。

〔2〕男、56才

ア、「雷の研究」の発表で先生にほめられた事。図書館にて多数の本をトコトン読んでまとめたので、自主学修として初めてのものが評価され、その後の自分もやれるんだという自信につながった「大きな一言」であった。

イ、高師の高橋先生との出会い。中1・2と指導を受け、3年から名古屋へ転校。明和高校入学したところ、明和のサッカー部のコーチに高橋先生が来られ再会。

ウ、理科の実験で水素が爆発して金原さんの眼が失明に近い事故。元気を出して頂くよう皆で手紙を書いた様な記憶あり。

エ、先生につけたアダ名。現在でも記憶している不思議さ。ワンチャンは数学の先生、転校の折ミケランジェロ「ダビデ」の写真を頂いた。

オ、転校後、生まれて初めて女の子から手紙をもらった。うれしかったが母親が心配して今後は葉書でやりとりしなさいと言われた。

〔3〕女、56才

ア、岡崎高師の附属中学第一回生入学した時のあの校舎は何の跡であったのでしょうか。広々とした荒地に粗末な校舎とは思えない様な木造でした。が当時自分は粗末と思ったことがありませんで喜びと誇りで楽しく通いました。

イ、「農業」という時間があるが班別に四畳半位の土地が配当され、さつまいものつるを植えつけました。草取りをする暑い日に日傘をさして草を取ったせいか、「可」が通信簿についたのが忘れられません。

ウ、母のお古のオーヴァーコートを着て通学していましたが、梅津先生が私の後姿を女っぽいか大人っぽいか言われました。中学一年生のときですから、私がまかせていたのか、コートがプリンセスラインでしたから大人っぽく見えたのか、先生がHだったのか失礼ゴメン。

エ、二年の2学期で転校。東京へ引越して行くとき、豊橋駅にFさん・Nさんが見送ってくれてスゴク嬉しかった。

オ、入学したばかりの朝礼で主事先生「在所に主たれ」の訓話あり。不思議と印象に残り今もその精神です。

〔4〕男、58才

ア、海に面したお城の中にある風光明媚な環境の旧制中学にいたことがあったので、附中のボロ校舎が印象が強かった。

イ、岡崎の旧制中学にもいて、そこでは先輩の影響が強かった。附中第1回生となり少々さびしかった。

ウ、附中に来る迄男子校ばかりだったので、女生徒がいたことは初体験で大変嬉しかった。

エ、旧制中学の蛮カラ・質実剛健の気風に比べ、附属の生徒はおぼちゃん・おじょうちゃんの感じが強かった。

オ、旧制中学では農作業が多かったが、附中の理科・社会・図工・国語等自分で調べ研究発表する授業は非常に面白かった。創造力・独創力をつけるのによいと思う。

以上は、昭和22年5月～25年3月、豊川市に校舎があり、校名が岡崎高等師範学校附属中学校～名古屋大学岡崎高等師範学校附属中学校の時の学校生活の印象を書いたものである。

6. 古い卒業生の回答 その二

昭和22年5月～28年3月の6年間、附中から附高へと進んだ第1回生の回答を読んでみよう。校舎は豊川市にあったが、27年4月から校名が名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校と変更されている。

〔5〕女、56才

ア 窓ガラスもない校舎で授業が始まったこと。そこで

隈元先生訓示「在所主」のことば。(中)

イ、食糧難のとき固いパンを焼いてもらって、本郷へ1泊旅行につれていってもらったこと。小学校の修学旅行はありませんでしたから。(中)

ウ、男女の区別なく教育されたこと。(中高)

エ、第1回生としての誇りと自覚をもたされたこと。(中高)

オ、附属高校で当時としては珍しく、紀伊半島めぐりの修学旅行が出来たこと。ただし男女別日程。

〔6〕男、56才

ア、「在所に主たれ」隈元先生から授った、今も、小生の座右の銘。(中)

イ、パイプガラス窓。教室の貴重品であったのだろう。(中)

ウ、ボロ校舎。旧海軍工廠寄宿舎を改造。(中高)

エ、チンチン電車で国府乗り換え。なつかしい。(中高)

オ、ファイアーストーム。恩師や高師のお兄さんたちと肩組んで、ドラ声はり上げて。(中高)

〔7〕男、56才

ア、障子やパイプガラスの窓があったボロ校舎。張ったばかりの障子をいたずらで破られて泣いた女の子。(中)

イ、野球部で毎試合スコアブックをつけていた。市大会のゲームははっきり覚えている場面が多い。(中)

ウ、中1の夏、北設本郷で1泊。翌日昼食用のパンが「糸を引く」と皆で鮎の泳ぐ川へ投げ込む。食べ物のない時川に流れるパン。(中)

エ、理科の実験で水素のフラスコが爆発。呆然とした先生の顔。前列の生徒の衣服が硫酸でボロボロになり後で困った。(中)

オ、中学に早熟なカップルがいて、昼休みごとに野次にもめげず小川の堤防に並んで座っていたが、あれは不思議だった。

〔8〕女、56才

ア、本郷へ旅行。夜、大部屋で男生徒と女生徒も和気藹々とした雰囲気の中、中根先生の広島原爆投下翌日町を歩いた時のお話、ボーイソプラノW君の歌、Sさんの「雨のオランダ坂」の歌。翌日浦川迄歩いた道のスバラシイ景色が懐しい。(中)

イ、石黒先生の音楽の授業は教科書も素晴らしく世界の名曲を多くお教え頂き幸せでした。図工の時間も中野先生は名画鑑賞の時間が多く、絵画鑑賞が好きになれたのもそのお蔭と感謝しています。梅津先生の英語は灰色一色でした。(中)

ウ、奈良京都の修学旅行。まだ食糧事情の悪い当時、お米持参で京都博物館・知恩院・猿沢の池前の旅館が今も懐しい思い出。(中)

エ、名大合同の体育祭は楽しかった。仮装行列やファ

イアーストームも印象深い。(高)

オ、湯川秀樹博士のノーベル賞授賞に感激。(高)

[9] 男、56才

ア、バスケットの練習中左手首を骨折、3か月のギブスがとれた翌日跳び箱にて又同じところを骨折、2か月のギブス。若気の至りというより馬鹿だと思った。(中)

イ、その他、特にほめられたこともなく常に恥をかきことのみ。余り良い思い出はありません。(中高)

[10] 女、56才

ア、中学卒業の時だったと思いますが、隈元先生がこれから先何か行動をする時にはこんな事をしたら両親がはたして喜ぶだろうか、それとも悲しむだろうかと考えてから行動しなさいという、お言葉は卒業以来40年を経た今も折にふれて思い出され、先生のお姿と共に忘れる事ができません。(中)

イ、石黒先生と佐伯先生の授業で「川」「花」「手に手を取り合い」など二部三部の合唱曲が印象深く楽しくて、その曲を聞く度に中・高時代をたいへんなつかしく思い出します。(中高)

ウ、体育大会は仮装行列したりフォークダンスなどが楽しかったですね。「ユーモレスク」に合わせてダンスを踊ったことがとても楽しく思い出されます。

(高)

エ、井沢先生が「フリードリヒ・ニーチェ」のことを語られたこと。井沢先生の魂を揺さぶったのであろうニーチェ、最後の個人主義者そして人間の教師として私たちを目覚ますもの。後に、講義は全力投球であれだけ一生懸命になることはもう難しいかも知れないと回想された先生のお姿とニーチェの事は忘れられません。(高)

オ、高校修学旅行。瀨峡は初めての所ですし瀨八丁の深山幽谷の美は印象深く残っております。(高)

[11] 男、56才

ア、不備な校舎ながらも楽しかった開校当時、やんちゃ坊主におてんば娘の寄せ集まり。(中)

イ、ガラスがなくパイプの窓。暗い教室、前後左右にしか動かせない重い机、でもピアノがあった。(中)

ウ、新居弁天での臨海学習、何もかも不足な中、のびのびと4～5日が過ごせた。(中)

エ、運動会の仮装行列、寄せ集めの材料であそこまで良くやった。(中)

オ、隈元主事の「在所に主たれ」の校庭での講話。私の経営思想にも今日生かされている。(中)

以上、中学校生活に比重のかかった内容である。回答 [9] をどう読むか、それと関連して、回答を寄せなかった人達のことをいかに推測するか、が課題であ

ろう。

7. 古い卒業生の回答 その三

昭和25年4月～28年3月の3年間、外部中学から第1回生として附属高校へ入学した人の回答である。

[12] 女、56才

ア、「野葡萄」という学園誌。井沢先生を中心に皆精一杯背伸びして。エッセイとかアフォリズムなどということばもこのときに憶えました。「創る」よるこびも。

イ、畑先生の「漢詩」。たしかはじめに原文を中国語で読んで下さり、音の美しさに感銘をうけました。

近代詩「てふてふ」なども教えていただきました。

ウ、体育のリズム・ダンス。いつもいつも太鼓のリズムだけのウォーキング。年令の割にジャズのリズムにのれるのもこのお蔭ではないかと今では思います。

エ、ダルトン先生の「干飯」。生活の中の科学的視点を教えて下さった。知識に止まらず知恵とすること。

オ、「早弁」。私たちの時代には男子だけでした。狭い運動場のよい場所を確保するためでもあったようです。ともかく寸暇を惜んでみんなでよく遊びました。私の娘たちが高校で「早弁」をしているときき驚きました。

[13] 男、56才

ア、非常に老朽化していた豊川校舎。

イ、放課時間に行った男女混合の馬乗り。

ウ、各種文化祭。

エ、「のぶどう」の発行。

オ、戦没者の再火葬の臭い。

[14] 男、56才

ア、岡崎高師のグラウンドで、赤々とファイアーストームをたき、スクラムを組んでワッシュイ・ワッシュイと夢中に声をはりあげた。若き青春のエネルギーの吐け口であったのか。

イ、レクリエーション(当時は遠足とっていたのかな)で伊良湖岬へ行き、その反省会でよんだ句「伊良湖岬、燈台あれど早稲田なし」が好評で金賞に何か賞品をいただいた。

ウ、修学旅行での瀨峡は兩岸の静けさと水の青さが一体となって、すいこまれるような美しさであった。白浜の宿で親しい友とふとんを並べ、なかなか寝着かれなかったのも忘れられない。

エ、成就しなかった片思い。附属中学へ前芝から通っていたKさんというかわいい女の子がいた。帰りにラブレターを渡したら封を開けずに先生のところへ持って行かれてしまった。当時は本当に真剣であったが、今は思い出の一つ。

オ、勉強の面では、皆さん優秀な方たちばかりでついて行くのに本当にシンドかった。

[15] 男、56才

ア、運動会か学校祭かの後に行ったファイアーストーム。

イ、井沢先生のご指導で八ヶ岳方面の数度の山登り。

ウ、単位制と生徒を信頼した学校管理。

エ、個人的な事ですが、浴場を改装した講堂でのバイオリンの演奏で失敗した事。

オ、豊川空襲の戦死者を、戦後数年たって茶毘に付していた事と朝鮮動乱の開始。

[16] 男、56才

ア、一期生であったため、学校が出来上ってゆく過程を、自らも参加しながら眺められたこと。

イ、大学受験の事など一切考えずに、自由に充実した高校生活を送れた事。

ウ、楽しい授業。例えば生物の課外授業で大塚で一週間合宿して、プランクトンの観察等をした事など懐しく思い出します。

エ、美術部への参加。生涯の趣味として、今でも絵を描いて楽しんでいます。

オ、校内誌「野ぶどう」。今も大切に、時々読み返しています。

[17] 男、56才

ア、体育祭のファイアーストーム。酒が飲めた。公認であったと思う。

イ、川べりで毎昼食の弁当を食べたこと。

ウ、奥浜名・方広寺への遠足。

エ、校章を生徒会で多数決で決めたこと。

オ、校則がなかった。全く自由であった。

[18] 男、56才

ア、同じ中学から男子2名、女子3名が合格したが女子3名は県立校に行くとのことで来校せず、先生方の助言もあり、それぞれのお宅におじゃまし入学を勧誘したこと。結局全員附属に来て一緒に通学した。

イ、全校100名程の学校、各クラブとも人数不足で何も知らないまま勧誘されたサッカー部に入り、とにかく11人でクラブ活動を開始したこと。そして陸上部を創部したこと。

ウ、1年末、父兄同伴の懇談会で同じ中学から来た他の者より学力・特に英語力が劣るとの御指摘を受け、毎日英作文を1課ずつ井沢先生に提出、ていねいな添削を受けたこと。後々米国駐在のとき役立っています。

エ、第1回の文化祭がクリスマスの頃開かれたが、この時演劇の出演者を写したフィルムを自分で現像、見事に失敗してしまったこと。何しろ押入れで皿現像をしたのだから一寸無謀でした。

オ、校舎は本当にボロボロで廃屋そのものでしたが、校風は自由で進取の気風に富んだものであり、若い自分の知識欲を満足させるものでした。今の有名な管理教育とは全く逆。

以上、男女共学の旧制高校があったとしたら、このような内容ではなかったかと思われる回答である。初期の新制高等学校の一部には継承されていたこのような雰囲気、わが名大附高では、すでに過去のものとなったようである。

8. 新しい卒業生の回答 その一

アンケートの回答を対照的に取り扱うのは、興味深いことである。

そこで、昭和57年4月～63年3月の6年間、附中生活と附高生活を経験した、新しい卒業生からの回答を読んでみることにする。第36回生のものである。

[19] 男、21才

ア、小人数制と中・高一貫教育による友人関係の深さ。

イ、顔ぶれがあまり変化しないため、先生と生徒の信頼関係が強い。

ウ、校則が緩やかだったこと。

エ、学校へ毎日行くことを一度も苦痛と思わなかったこと。

オ、変な友人ばかりだったこと。

[20] 女、21才

ア、中学2年の林間学校。夜きもだめしをした後見た星空がとてもきれいだった。(中)

イ、高1の林間学校。楽しかったというか複雑だけどとてもつらかった山登りは忘れられない。(高)

ウ、高2の修学旅行。割と自由に楽しく見たい所を見られたし、附中・高の思い出の中では一番の思い出だと思う。(中高)

エ、高3の学校祭。最後の学校祭ということもあって、気合いが入ってたシラサキ一体になれた気がすごかった。(高)

オ、なし。

[21] 女、21才

ア、中3の担任の先生ははじめのある方で、全員STの机の上で正座してはじめをつけさせようとしたが効果はあったのか。(中)

イ、高1の文化祭に合唱の指揮者が大変楽しい方で顔を見るたびに笑ってしまって、本番の直前も笑いをこらえる有様。(高)

ウ、高1の遠足で初めて私服を着て喜んでいましたが、他高校生から「君たち小学生？」と聞かれショックだった。(高)

エ、高2の修学旅行の萩市内で犬に追いかけられる。

帰りの新幹線で友人と菓子を食べていた後、友人と同時に腹痛がおきた。(高)

オ、高2の体育の創作ダンスでみんなで早朝や授業後おそくまで踊りまくった。おかげでダンスは大成功でした。(高)

[22] 男、21才

ア、6年間を通した学校祭。

イ、球技、陸上競技、バレーボール等各運動大会。

ウ、中学柔道部、高校ハンドボール部での様々な出来事。

エ、色々な人生観や考え方を与えてくれた先生方との6年間を通しての交流。

オ、附属高校・中学という特殊な環境の中での友人、異性との交流。

[23] 男、22才

ア、学校祭が思い出深い。かならず何かトラブルがあるんですよね。クラスのことや恋愛や変化のある、変化に富んだ毎年一回の美しい時期でした。(中高)

イ、留年してから4月の最初の授業が何か別の所の場所へ転校していった時の心境。あのときの緊張は今でも忘れません。(高)

ウ、修学旅行の時に、わかり合いキズ付けあった友人達と語った夜が印象深いです。(高)

エ、学校の火事。すごこわかった。(高)

オ、卒業式。自分は勉強が大キライだったのだけど、イザ卒業となると長い間の生活の一部が欠けるようで涙が出てしまった。人より1年長く居た分だけ情が多かったのかも。(高)

[24] 女、21才

ア、なんでもないことだけど、授業中。自分の座った席なんか全部思い出せちゃうほど、まわりの子とのなんでもないおしゃべりが今思えば楽しかった。

イ、卒業文集作り。

ウ、思い出っていうのかどうか、けどやっぱり名大附の子みんなに共通する、温かさっていうか時にはばかを見る程のお人好しとか単純なところとか連帯感の強さ、そんなとこ全部とてもなつかしく思います。

エ、高3の時の学校祭というかその準備の段階。受験勉強の事も気になりながらやっぱり最後ということで半分ムキになって朝早くから夕方遅くまで仕事をしたこと。その時は半泣きだったけど、ああいうことはもうないなって思うとさみしい。(高)

オ、受験勉強を放課後残って教室でやったこと。すごく寒いのにみんなとワイワイ言いながらやるのが楽しくて毎日残ってた。(高)

「6. 古い卒業生の回答その二」と比較すると、回

答の書き方に、中学と高校の区別がなく、高校側から6か年をまとめてみているものが目立つ。

また、古い卒業生が中学のことの方を取り立てて書いたのと好対照である。

9. 新しい卒業生の回答 その二

同じく第36回生のうち、昭和60年4月～63年3月の3年間、附高生活のみを体験した卒業生からの回答である。

[25] 男、21才

ア、高1の時、学校祭で熱気球を作ったこと。

イ、毎年の入学式で各クラス担任が発表される度に、ワァーと歓声上がり拍手が起きること。

ウ、林間学校でテントを換っていたことが見付かって腕立て・腹筋各百回、倒立3分やらされたこと。

エ、教育実習にくる実習生の多いのに驚いたこと。

オ、高3の学校祭で火災が発生したこと。

[26] 女、21才

ア、高2の研究旅行の研究で萩の町を自転車でまわっていると、白い犬が自分達の行く先方で待ち伏せていた。

イ、研究旅行の行きの新幹線で友達と宴会をやってしまった。私は折りたたみのカサをマイクに演歌を歌いまくっていたのである。

ウ、高3の水泳大会のとき、自分より年下の子達が先輩だとは知らずに自分に気軽に話しかけてきた。

エ、高3の文化祭・音楽祭でベルトをきつく締め過ぎた状態で思い切り歌ってしまい、後で腹痛をおこしてしまった。

オ、高3の頃から友達にも「早くひとり暮らしがしたい」とこぼしていた。強硬手段で今それを実行している。

[27] 男、21才

ア、3年の文化祭・合唱で頑張って1位をとったこと。

イ、同じくホームルーム企画の委員として参加して2位をもらったこと。

ウ、1年の文化祭でピアノの伴奏者の一人に選ばれ、伴奏の出だしでミスしたこと。

エ、2年の文化祭でホームルーム企画のミュージカルに裏方として参加したこと。

オ、図書委員を何期かやって、そこで仲間が出来いろいろ語り合ったこと。

[28] 女、21才

ア、高1の時の林間学校。イヤイヤながら山の頂上まで行かされた。

イ、愛教大附属高戦の時の野球部の試合。いつのまにか両校の口ゲンカが始っていた。

ウ、学校祭のホームルーム企画の準備のため、遅くま

で学校に残ってお菓子たべたりしながら準備したこと。

エ、高3の時の学校祭の火事。火を見てびっくりして足がすくんでしまった。

オ、受験が近くなってから、みんなで学校に残って一緒に勉強したこと。

これは、「7. 古い卒業生の回答その三」と対照するものである。その間に、35年の歳月がある。

そして、校舎の所在も豊川市から名古屋市東区を経て、現在の校舎がある名古屋市千種区へと移っている。また、学校の社会的評価も、生徒募集方式の変更と直接のかかわり合いをもって、大きく変化してきている。

アンケートの回答だけを単純に比較しがたいけれども、新しい卒業生の回答が行事中心に書かれており、個人的な特色が少ないのに対して、その35年前の卒業生の回答には、内面とつながりのある、個人個人の心のあり方に関連する部分がある。

10. 考察 その一

「新しい卒業生」と表記した学年とほぼ同じで、その一年下になる学年が第37回生である。

その生徒が、高校3年に在籍していて卒業間近となった、平成元年1月に、教室でこのアンケートに答えてもらった。

その回答のうち、昭和61年4月～平成元年3月の3年間だけを附属高校で過ごした者が記述した内容を項目としてまとめると次のようになる。該当する回答は13通であった。

- 高2の研究旅行 (10)
- 部活動 (10)
- 高1の林間学校 (9)
 - (内、その時の登山 (3))
- 学校祭 (7)
 - (内、その時の合唱コンクール (1))
- 変った高校 (4)
 - (内、名札をつけないこと (2))
- 友人関係について (4)
- 学校火災があったこと (4)
- 体育大会 (2)
- 対愛教大附高戦 (2)
- クラス役員委員等 (2)
- 大学入試模試 (1)
- 病氣入院 (1)
- 音楽バンドに入ったこと (1)
- 学校の環境の良さ (1)

これらの事柄にまつわる、それぞれの個人的な思い出を記述した内容は、「8. 新しい卒業生の回答その一」「9. 新しい卒業生の回答その二」と近いものではあるが、卒業後のことが先になって回顧気分には浸れない不足感がある。

回答を読む時に、在校生については記名を依頼しておいたので、記憶に新しい、該当生徒の学校生活を思い浮かべながら納得したり、予想外の発見に驚いたりすることができた。

最初に考えたのは、それぞれの生徒の素質や個性が第一であって、それがどういう具合に中等学校教育と触れ合ったかという点が第二であるということ。中学校・高等学校教育は生徒次第の部分が相当にあることがはっきりしたように思う。

即ち、教育される側の生徒の素質や個性が求めるものが教育の場にあった時、印象として強く残っているようである。

その際に、素質や個性というほどのものでなく、青春期においてだれもが共通して求めるもの場合は、受容の仕方に、個人個人の特色が出ているようである。

教育の場で意図的に準備できるのは共通的に求められるものであるが、それとは別に自然発生的に教育の場に備わっているものがある。例えば、教える側が醸し出す人間味というようなものが、教育効果を格段に高めている様を読み取ることができる。

また、授業のような学校における日常的な営みの中から、心を打つ何かを感じ取っているすばらしさは感動的である。

学校教育を取り巻く、社会的な諸要素や家庭的な諸問題が印象深いとする回答例もある。

言うまでもなく、中等学校生活は青春前期の魂が触れ合う、共同生活の場である。共同生活の場として、よく機能していたかどうか、教師と生徒の人間関係はどうであったか、というようなところにも留意して、回答を読んでいきたい。「考察その二」へ続く。

11. 古い卒業生の回答 その四

本校は、豊川市で創設された後に名古屋市へ移転し、昭和28年5月から38年3月までは、名古屋市東区の旧愛知第一師範学校附属小学校の古い木造校舎を校舎として借用していた。

その間の卒業生の回答を掲げる。

[29] 男、49才

ア、創立十周年行事。入学した年に、土岐善麿氏の作詞の校歌が制定されたことと同期の美人中の美人がピアノを演奏したのを薄すらと覚えております。

(高)

イ、伊勢湾台風のこと。台風の凄さに、翌朝学校へ出

かけたところ、あの木造でありながら中廊下が壊れた程度で、ホッとするやらガッカリやら。なお、本校の被害宅へ水や食糧を持っていったことや、自衛隊の船のところで土のう作りなど。(高)

ウ、修学旅行。他の高校が中国四国の修学旅行のとき九州まで。しかも日程が一日多かった。特に山口県のカルス台地や長崎・熊本・阿蘇・別府など思えば沢山の事物を見学。旅館での友人との語りなど。(高)

エ、金沢大学附属高校との対抗戦。金沢までは行きませんでしたでしたが、地元では暑い中を金山体育館まで出かけ応援しました。とにかく暑い。勝負は負ける…。(高)

オ、秋の運動会。マスコットを作り応援するプロセスに色々苦しいこと楽しいことがありました。(高)

[30] 女、49才

ア、毎週一回の午後2時間の体育の授業の都度、瀬戸電に乗って名城内のグラウンドに出掛けたこと。(高)

イ、附属の体育館ではなくて、お隣の市立工芸高校の講堂を借りて、文化祭をやり劇や音楽を楽しんだこと。(中高)

ウ、毎年夏休み中の野間の臨海学校。3泊か4泊か記憶がありませんが、合宿をしながら参加された先生方との交流は忘れられません。(中)

エ、美術の時間でしたが、雪が降り出すと先生が率先して校庭に出て絵画はそっちのけで雪合戦に興じたこと。附属ならではの教育でした。

オ、春か秋の遠足は必ず歩け歩けの文字通りの遠くまで足で歩くこと、随分歩かされたと思います。定光寺・宇賀溪・犬山等が心に残っています。(中高)

[31] 男、年令不詳

ア、金沢大学附属高校との親善対抗試合。金沢訪問、バレーボールクラブ。特に試合後の交歓、夜汽車での帰還の思い出。(高)

イ、中学から高校への編入試験。ひとつの転機でもあり、緊張とその後の喜びの実感。(中)

ウ、赤塚の木造校舎の雰囲気。時々、校内のいろいろな場面が夢の中にあらわれることがあります。(中高)

エ、中学の浜名湖の臨海学校と高校の木曾駒ヶ岳の林間学習。(中高)

オ、6年間、比較的のんびり過ごせた事。(中高)

この頃までは、附中・附高ともに1学年2学級、実にコンパクトで家庭的なところが特色の学校であった。

12. 古い卒業生の回答 その五

昭和39年1月、名古屋市千種区東山の名古屋大学構内へ校舎が移転完了し、40年4月からは附中1学年2学級、附高1学年3学級となり、現在に至っている。

校舎が大学構内へ移転完了した頃から、昭和55年3月までに卒業した生徒から寄せられた回答、8通を次に掲げる。

[32] 女、年令不詳

ア、八高の寮歌を体育館で先輩方から教わった事。

イ、修学旅行で、奈良大和路をグループ行動させてもらった事。

ウ、学校祭の後夜祭で、夜暗くなった後ファイアーで歌った事。

エ、ボーリングで先生も生徒も、本山ボウルで早朝ゲームにはげんだ事。

オ、昼休みに池の鯉にパンの残りを毎日やりに行っていました。でもある日大量に死んで、それを鯉コクにして食べたとおっしゃった先生がいた事。

[33] 女、42才

ア、中学校の時の臨海学校。最初は泳げなかったが最後には皆の声援の中をたくさんの距離を泳げるようになった。

イ、中学校の時のクラブ活動。4、5年上の高校の先輩達との接触が自然に出来、うれしかった。

ウ、高校の時の営火祭。夜行われたことと、火を囲み先輩後輩の別なく話し合えた。

エ、体育祭前の応援合戦の準備に、皆でワイワイガヤガヤと物を作ることなど楽しかった。

オ、クラブ活動の夏休みの合宿。学校で畳を借りフトンを上に乗けて寝泊りしたことなど附属時代はなつかしく楽しい限りでした。

[34] 女、年令不詳

ア、中学入学式。初めての制服と緊張。

イ、中学アナウンス部。朝の放送のアナウンスや選曲。

ウ、高校1年林間学校。山登り、自炊。

エ、高校バレーボール部。愛教大附高戦など。

オ、高校3年学校祭。合唱コンクールでの優勝。

[35] 男、29才

ア、林間学荘での思い出が深いです。それ故卒業直後2回学荘をお借りして同級会を開きました。これも又大変印象深いです。

イ、報道局の活動が楽しかったです。共に活動した先輩後輩とはまだ連絡をとり合っています。尚、報道局の結束が固かったのは独立した部屋があったからだと思います。

ウ、文化祭も良い思い出です。ただクラスの結束度が直接反映するものであるため、当り外れが大きかつ

たです。私の場合3年の時のクラスが一番良かったです。

エ、2年の時クラス誌を発行したのは大変良かったです。クラスをまとめる紐帯として作用し、学年の終わりにクラス全員で先生方に感謝状を贈る等いろいろ面白い思い出を作る事ができました。

オ、卒業文集を発行した事も印象深いです。一つの存在証明としてよい記念になりました。

[36] 男、29才

ア、報道局に入り色々活動した事。新聞の定期発行、「耕」の発行など。

イ、卒業アルバムの作り方(内容)をちょっと変えた事。

ウ、バドミントン部に入った事。

エ、卒業文集が出来た事。

オ、卒業する時英語の成績が悪く追試を受けた事。その時他のクラスの子が進路相談に来た。

[37] 男、35才

ア、臨海学校。軍隊式というか中学生にしては厳しい生活であっても反面楽しかった。

イ、林間学校。特にオリエンテーリングでの高1の仲間との気の使い合いができたこと。

ウ、中学、高校を通して両時代とも卓球クラブの部長を経験できたこと。

エ、高2の研修旅行。少数の人のために最後の日に自由時間中正座させられたこと。おもしろくはないが貴重な体験でした。

オ、全体を通して自分自身の人間形成に大きな影響を及ぼした先生方と出会うことができたこと。

[38] 男、31才

ア、高校3年生の時の文化祭の合唱コンクール、営火祭。

イ、朝鮮問題を扱ったクラブ活動、顧問田中先生。

ウ、戸荻先生のプリントを使った化学の授業。

エ、高校3年生の時の研究旅行。京都及び大久野島。

オ、なし。

[39] 男、30才

ア、中学1年の時、国語辞典を半ば強制的に購入させられたこと。因に現在も愛用しております。

イ、中学の時暗記した英語の短文を今でも覚えていること。Anyone who can draw such a perfect circle must be a great painter.

ウ、中学3年の時、社会科研究室前廊下のスピーカーを落とし、加藤先生にお尻をたたかれ始末書を書かされたこと。

エ、通知表で「10」をとったのは、中学の技術家庭と高校の生物だけだったこと。

オ、高校音楽の授業で「イッヒリーベ ディッヒ」の

曲を暗唱させられたこと。今でも風呂に入ったときに口ずさんでおります。

これも当り前のことであるが、中学高校にふさわしく用意されているモノヤコトの方が切っ掛けとなって、その枠内を中心に進展するのが学校教育であることが明瞭である。

加えるに、学校集団の人間関係、生徒対生徒・教師対生徒が有効に作用して、思いがけない効果の上がるのも中等学校教育の特色であることがよくわかる。

13. 考察 その二

回答内容の概略を「印象深い事柄の集計」としてまとめ、一覧表にしてみた。

共通的な項目として、行事が印象深いとするものについてみると、古い卒業生では22%、それに次ぐ卒業生では42%、新しい卒業生では48%となっている。

行事中心主義の傾向が強まっているのが最近の学校生活である。以前の学校生活においては、古い卒業生で校舎関係11%、友人関係10%、授業関係10%が目立っている。それに次ぐ卒業生で部活動関係13%、授業関係9%が目立っている。

また、新しい卒業生では友人関係12%の数値が大きい。

共通しない項目を表の末尾にまとめておいたが、古い卒業生の方に、行事関係の印象項目が少ない分だけ個人的な印象項目が多く並んでいる。

自分に合うものを、自ら求める傾向、自ら求めるような学校生活の仕組みであったことがわかる。

もちろん、項目そのものの意味する内容は、同じ項目にまとめてあっても、個人ごとに年代ごとに差異がある。

従って、一覧表全体から関心の度合いがいずれの方向にあったかを見て取ることはできるものの、それぞれの項目を卒業生がいかに関心しているか完全に読み取ることはできない。

結論としては、個人個人別の学校教育に対する充足度合いのそれぞれを、調査研究する材料としてアンケートの回答を、個人個人別に扱うしかないように思う。

学校教育の力を、伸長し・向上しようとするそれぞれの人間の力が、いかに活用したかをみるのが肝要なところである。

それでは、回答を寄せなかった人についてどう考えたらよいのだろうか。私は、学校生活における充足度合いと、現実の今の生活に没頭する度合いとの相関関係にあると考える。

現実生活に没頭する度合いが、学校生活における充

同窓意識の拠りどころ

印象深い事柄の集計 ()内は%で示す

	古い卒業生 5. 回答その一 6. 回答その二 7. 回答その三	それに次ぐ卒業生 11. 回答その四 12. 回答その五	新しい卒業生 8. 回答その一 9. 回答その二
校外行事	11 (12)	15 (27) 内, 金大附高戦 2	11 (22) 内, 愛教大付戦 1
校内行事	9 (10)	8 (15)	13 (26)
授業関係	9 (10)	5 (9)	2 (4)
勉強関係	2 (2)	3 (5)	3 (6)
先生の思い出	7 (8)	2 (4)	3 (6)
部活動	6 (7)	7 (13)	1 (2)
生徒会関係	1 (1)	2 (4)	1 (2)
文集等	3 (3)	4 (7)	1 (2)
自由を校風	4 (4)	1 (2)	1 (2)
校舎関係	10 (11)	1 (2)	1 (2)
異性を含む 友人関係	9 (10)		6 (12)
入試単独 のこと	1 (1)	1 (2)	
音楽演奏会	1 (1)		1 (2)
式典関係		2 (4)	2 (4)
在所に主たれということば [3] のオ [5] のア [6] のア [11] のオ 一回生であること [3] のア [5] のエ [16] のア 水素実験の事故 [2] のウ [7] のエ 外弁当早弁当 [12] のオ [17] のイ 単位制であること [15] のウ 空襲死者の再火葬 [13] のオ [15] のオ 通学のチンチン電車 [6] のエ 湯川博士のノーベル賞 [8] のオ	八高寮歌を習ったこと [32] のア 校庭の鯉の思い出 [32] のオ ボーリングの流行 [32] のエ 伊勢湾台風 [29] のイ	教育実習生 [25] のエ 学校の火災 [23] のエ [25] のオ [28] のエ	

足度合いを上回るか、学校生活における充足度合いをなつかしむ余裕を与えない場合、無回答になるようである。

上記以外の場合、たとえば学校生活における充足度合いが低かった場合でも、無記名アンケートの回答は届いているのである。

14. 考察 その三

社会生活に余裕があり、学校生活時代の充足振りを、自己の成長過程としてなつかしむ度合いの強い回答を、いくつか掲げてみたい。

[40] 女、55才

ア、文芸誌「野葡萄」寄稿と編集委員としての仕事。男女間で激論をするなど、今思い出しても胸が高鳴る。(高)

イ、演劇部の練習とコンクール参加上演。真夜中までの練習など、現在の高校生に許されるだろうか。(高)

ウ、経済的事情、特に高3の秋に13号台風による水害のため被害大により、進学を断念しなければならぬかと思ひながらの勉強。苦しかった思い出。被害後の10月から奨学金をもらえるようになって本当に嬉しかった。(高)

エ、弁論部の活動。富田太先生の熱情あふれる指導。(中)

オ、井沢先生の「世界史」の授業と平野先生の英語の授業。この二科目がある曜日は登校が楽しみだった。(高)

[41] 男、55才

ア、校舎が豊川工廠の宿舎跡であったこと。畑の中に二階建4棟、中学は確か北側2棟と西側平屋建1棟。ガラスが棒ガラスであった。(中)

イ、運動場は高師農場の一部。畑をふみかためただけの400mトラックが出来る程の広さであった。見渡すかぎり建物のないといった表現がふさわしい田舎であった。(中)

ウ、当時、川を渡った東側は名大岡崎高師。ここもスキの原に宿舎を利用しての校舎であったように思う。その一角にうどん屋がありよく食べた。(高)

エ、高校2年から高師の天井の高い広々とした教室の方へ移転した。(高)

オ、現在の名鉄豊川線が国府から諏訪までの市内線であり、乗車はわが校がほとんど。一度私が乗った時、走っている市電から弁当箱を落した。わざわざ止めて拾ってもらったことがあった。(中)

[42] 女、23才

ア、中3の合唱コンクールでの出来事。AB両クラスとも優勝をねらっていて、当日までどちらが上かわからないぐらいだった。コンクール当日、B組の指

揮者が来なくて、代理の指揮者で歌った。B組の女の子の中には泣いている子が多かった。結果は私達A組が優勝だったが、みんな素直には喜ばなかった。結果発表のとき、B組の指揮者が来ていて、飯島先生がその指揮者でもう一度B組に歌うチャンスを与えてくれた。そのときA組の誰もが手をたたき、B組の歌を応援した。あのときほど「仲間」というものを感じたことはなかったし、私もその中にいると思ったときうれしかった。(中)

イ、いつの文化祭でも、クラスで合唱コンクール演劇コンクールなどに協力しあって、がんばっていた頃のことは思い出に残っているものです。悔しくてもうれしくても泣いていたし、クラスがまとまっていたときだったと思います。(中高)

ウ、高2のときの生徒会執行部での活動のこと。文化祭に向けていろいろ改革をしようと盛り上がり、夕方遅くまで残って作業していたこと。メンバーが気の合う子ばかりだったせいもあって、あの子のメンバーは、今でも何でも話せる友人となっている。(高)

エ、部活動について。中1のとき、高校の人が練習しているコートでボール拾いをしていて、どうして高校生の人まで拾うのだろうと思っていた。中高合同でテニスの練習を行うことにより、少々とまどうこともあったが、ずいぶん上の先輩まで知ることができてよかったと思う。厳しかった練習も今はなつかしく、OB会も楽しみです。(中高)

オ、陸上競技大会で毎年、クラスのゼッケン作りに加わり、何とか他のクラスより目立つようと工夫したこと。中2の応援合戦のとき、早朝練習に学校へ来たり、下校後も近くの広場で行ったりして優勝し、クラスのみんなが泣いてしまったこと。応援は常に声をはりあげて、男子女子ということなく一つにまとまっていた。私たちの学年は、お祭り好きだったため盛り上ったと思う。(中)

こういう卒業生がいるということ。即ち、こういう卒業生を送り出す本校の、中等学校教育には力があるということ。その教育力の作用に対する個人個人の受け止めには差異があり、時代による差異もあることが納得できる回答である。

そういう、教えられる側での長い歳月をかけた印象づくりが、同窓意識を生み出す源泉である。以上の3通について言えば、強い同窓意識を感じる事ができるだろう。

従って、強い同窓意識を持った卒業生がどれ程いるかということが、その中等学校教育の評価そのものとなり、当該学校の社会的評価の中心をなす筈である。

アンケートの回答は、同窓意識の根源の分析的把握のための材料と考えられる。

本校を事例として中等学校教育の教育成果を、民俗学的手法を応用した上の、妥当性を持った評価を試みるならば、こんなものではなからうか。

15. 結語

回答の〔1〕から〔42〕まで全体についてまとめてみると、本校教育は高く評価されていると言ってよいと思われる。

古い卒業生の方には、自己の内面的成長に資した項目の思い出を書いた人があるのに対し、新しい卒業生の方では、準備された行事に参加したことの思い出項目が多かった。

私達は、そういう移り替わりが本校44年の伝統の推移と関連していることを感得しているが、本稿には記述しなかった。

なお、アンケート回答に付した年齢は、平成2年4月1日から始まる年度中に達する年齢である。

本稿のまとめとして、思い出深い事柄の調査から結論らしきものを引き出すと、次のようなものになるであろう。

中等学校教育を通過儀礼の場と考えたとき、そこを通過する個人個人の生徒にふさわしい、それぞれの儀礼は個々別々であるということ。

また、それぞれの生徒集団にふさわしい通過儀礼も、それぞれ別個の形で存在するものであるということ。

そして、通過儀礼そのものにかかわる教師もしくは教師集団の在り方によって、通過儀礼そのものが生徒もしくは生徒集団にとって、ふさわしくもなれば、ふさわしくもなくもなるということ。

換言すれば、教師そのものが通過儀礼の役割りを担っていると考えるのが自然である。それらについての思い出を教えられる側からの教育評価と結び付けたのである。

教えられる側からの教育評価こそ、教育を底流において動かし続けている力強い作用である。

それは、同窓意識という形で世の中に知られることがある、表面の風波を物ともしない本流をなすものである。